北海学園大学　人文学部

Human ヒューマン

2012 Vol.01

特集

人文学部卒業生に聞く 学部の魅力！

「人が好き」人文学部

特集

人文学部卒業生に聞く学部の魅力!

人文学部の4年間があったから、今の私があります。

北海学園大学人文学部ってどんなところだろう。授業は、キャンパスライフは、就職は?　大学生活の疑問を、英米文化学科3年生の菊地真奈美さんが、社会で活躍している英米文化学科と日本文化学科を卒業した2人の卒業生に尋ねました。

語り手
白鳥　亜矢子さん
北海道医療大学心理科学部助教
2004年人文学部1部英米文化学科卒
藤女子高校出身

語り手
佐々木　亜沙美さん
㈱北海道アルバイト情報社勤務
2011年人文学部2部日本文化学科卒
岩手県立福岡高校出身

聞き手
菊地　真奈美さん
人文学部1部英米文化学科3年生
北海道大麻高校出身

◎自由な雰囲気のなかで、幅広く学べます

菊地――先輩は、どうしてこの学校を目指されたんですか。私は英語を学びたくてこの学校を選びました。英米文化学科だと英語だけではなく文化も学べます。幅が広がると思いました。

白鳥――高校2年生の時に、この学校の学生さんが教育実習で私の高校に来たんです。とても仲良くなり、影響も受けました。この先輩に誘われてオープンキャンパスに訪れた時の印象が良かったんです。とても楽しそうで、具体的に自分が通学するイメージが見えてきました。

佐々木――私は岩手県出身で、高校時代に母と二人で北海道旅行をする機会があったんです。札幌を訪れると、見知らぬ私たちにまちの人がとっても親切にしてくれ、いいまちだなぁ、と思いました。

昔から、本や雑誌などの編集に興味があったんですが、岩手ではなかなかそのような進路を望めません。東京は?と聞かれることもあるんですが、前へ前へと急ぎすぎるような気がして、田舎育ちの私には合わないと思っていました。田舎すぎず、都会すぎず、札幌はちょうど良いまちだったんですね。

菊地――高校から大学に入って戸惑ったこと、違いを感じたことはありましたか。

佐々木――高校までだと、先生が“ここまでやればいいよ”と目標を示してくれるじゃないですか。ところが大学だと自分で考えて、判断しないとなりません。はじめは戸惑いました。

白鳥――高校までは、毎日決まった時間に通学していましたが、大学では朝の講義がなければ遅く通学したりと、生活のスタイルががらりと変わるんです。授業も90分になります。自由度が一挙に広がって大人になったようなうれしさがありました。

今、私は大学で教える立場になっているんですが、自分の学生にも「自己責任」ということを言います。大学では確かに自由度が広がりますが、いい面と悪い面があり、自己管理ができないと流されて、取り返しのつかないことになってしまうこともあります。しかし、そのことを踏まえて大学生活を送れることができれば、とても充実した4年間になると思いますし、そのことは社会にも通じると思います。

◎基礎演習（ゼミ）、習熟度クラスは高校のクラスのようなまとまりがあります

菊地――そうですよね。私も高校までの抑えられていたような感じから解放されたように思いました。ところで佐々木先輩は、ひとり暮らしだったんですか。

佐々木――はい。生まれて初めてのひとり暮らしです。ゴミは捨てないと無くならないんだ。ホコリって、一日でこんなにたまるんだ。そんなことからのスタートだったんです。ひとりになって、自分がどれほど家族に支えられてきたのか、身にしみました。

最初の2週間ぐらいは閉じこもってしまい、寂しさに泣いてしまうこともあったんです。それでも、人文学部には基礎ゼミと言って少人数のゼミが1年からあり、そこで友だちに恵まれ、寂しさから抜け出すことができました。

菊地――英米文化には、スピーキング、リスニング、ライティング、リーディングで、最大5段階の習熟度別クラスがあります。人数も15人ぐらいだから、そこが高校のクラスのようなまとまりになりますね。

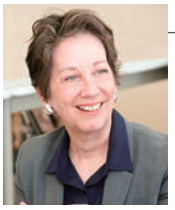
白鳥――今は、そんなに細かく分れているんですか。私の時代は2つしかありませんでした。ずいぶん、きめ細かくなったんですね。

菊地――はい、細かく分れているからこそ、無理なく学べます。また上のクラスを目指そうというモチベーションにもなります。ところで、私はサークルではアメリカンフットボール部でマネジャーをしているんですが、先輩はサークル活動もやっていたんですか。

◎大学の場所が良いから、いろいろな活動ができました

白鳥――私は「スポーツ観戦愛好会」という団体に入っていました。ちょうどサッカーのコンサドーレ札幌が盛り上がっていた時代で、スタジアムに応援に出掛けました。この時の友だちが、今も続いている一番の友だちです。

サークル活動の他、アルバイトもよくしました。ドーナツ屋さんの店員から、家庭教師、レストラン、コンサドーレの売店……。また、財団法人札幌国



英米文化学科　米坂　スザンヌ 教授（英語音声学）

人文学部の学生さんは皆、バランスがよいですよ。勉強はもちろん、でも勉強ばかりではない。社会性も身に付けている。人文学部が育てようと思っているバランスをすでに身に付けています。教えていて幸せです。これから社会で活躍していく中でも、バランスを失わず、同じ学校で学んだというつながりを大切にしていただきたいですね。

際プラザの活動に参加していましたし、授業の空き時間に英会話スクールに通っていました。いろんな活動ができたのも、学校が便利な場所にあり、時間が有効に使えたからです。この場所にあるこの大学だったからこそ、有意義な学生生活になったと思っています。

佐々木――私はサークルに入っていなかったんですが、ホテルのアルバイトでいろんなことを学びました。朝の5時に出勤する早朝スタッフとして働いたんですが、朝起きが楽しくなるぐらい、職場に受け入れてもらえました。こうなりたいな、と思える憧れの先輩に出会い、仕事への向き合い方、チームワークの取り方など、学校ではできない勉強ができたと思います。

そして私は2部だったので、クラスメートには社会人の方や年上の方も多く、刺激を受けました。中には還暦を過ぎた方もいらっしゃったんです。そうした方々は、学びたい、という意欲が強く、とても刺激を受けました。1部に転部することもできたんですが、この人脈を大切にしたいと思い、転部はしませんでした。

◎大学時代の留学体験が私を変えました

菊地――私はボストンのパイマナ大学に1カ月ほど短期留学しました。白鳥先輩も留学されたとか。

白鳥――1年生の時に、財団法人札幌国際プラザの国際交流プログラムで札幌の大学生をアメリカに派遣するプログラムがあり、それに選ばれてオハイオ州のハイデルバーグ大学に3週間ほど行きました。そして4年生の時にも長期留学をしています。外国への留学はとても大きな体験で、卒業後、ホテル業界に就職したんですが、英語への夢を断ち切りがたくオーストラリアの大学院に進学しました。そのことが今につながっています。私の原点は大学1年生の留学体験ですね。

佐々木――私は2年生の時にフィリピンに行きました。フィリピンに行ってマングローブの森を救おうという環境NGOの呼びかけを大学の掲示板で見たのがきっかけです。リポートを書いて提出すると選ばれ、他大学を含めた10人の学生と一緒に2週間ほど滞在し、現地で交流を行いました。生まれて初めての海外は、とても大きな体験でした。

◎この先生から学びたい―ゼミは同じ志の者が集まるクラスです

菊地――私は今年からスザンヌ先生のゼミに入ります。幅の広い大学の授業の中でゼミは専門性を深めることのできる場所ですよね。深く専門的に学ぶことが、きっと自分の自信になると思っています。先輩たちはどんなゼミだったんですか。

白鳥――竹内先生の生命科学のゼミでした。私のゼミは、通常の倍、3時間の時間を使って開講されたので、実践的なビジネススキルを身に付けるのに役立ちました。パソコンを駆使して情報を調べ、パワーポイントを駆使してプレゼンテーションを行う、当時としては先駆的なゼミでした。

佐々木――ゼミは高校にはないもので、この先生について学びたい、このテーマを学びたいと、自分の興味と意欲で選ぶ“同じ志の者が集まるクラス”です。私は、田中先生のゼミで、創作論を学びました。決められたテーマに基づいて文章をつくり、それを発表し、皆で検討するんです。年に1回はゼミ誌を発行しました。

先生のお知り合いで、実際にプロとして活躍されている方をお招きし、お話を聞けたのはとてもためになりました。私は新聞、雑誌などのマスコミに興味があったんですが、北海学園の先生の中に、プロとして現場で活躍されていた先生がいらして、先生から業界の生の話を聞けたことは高校と違うところだったと思います。就職活動の時、マスコミ業界のOB訪問を多くしたんですが、田中先生からもOBを紹介してもらい、とても感謝しています。

◎大学4年間のすべてが今の自分につながっています

菊地――私も3年生で、そろそろ就職活動が気になりだしてきています。

白鳥――10年も昔なので、変わった点もあるかもしれませんが、私たちの時代にはすでに「学内業界研究会」がありました。企業で活躍するOBを大学に招いて率直な話を伺うプログラムですね。このような機会に恵まれるのも、規模が大きく、各界にOBを輩出している学園ならではです。どんなところにもOBがいる。この大学の人脈の豊かさは、特に社会に出てから実感しますね。

佐々木――私の一つ下からは変わるようですが、私の時は3年生の10月から就職活動が始まりました。年明けから本格化し、2月に合同企業説明会、3月・4月に面接ラッシュ。私は5月に内定をもらいました。先ほどもお話しましたが、特にOB訪問を積極的に行いました。ホームページや就職情報誌の記載だけでは、本当に働きがいのある会社かどうかわかりません。やはり人を見ないと。また「ミナトコム」という北海学園独自の就職サポートシステムがあり、とても助けられました。

まだまだ駆け出しですが、やりたいことのできる会社に入れて幸せです。大学に入り、さまざまな人と出会い、経験をしたこと、それらは全部今につながっているんです。

白鳥――私は卒業後、英語への思いを断ちがたく、オーストラリアの大学院に進学しましたが、その時スザンヌ先生に、学校選び、英語での書類づくりなど、いろいろと助けていただいたんです。規模の大きな学校でありながら、きめ細かいサポートもある学校です。

高校生の時まで、英語はそれほど好きな科目ではなかったかもしれない。本当にこの学校に入って、英語が好きになったし、もっと極めたいと思いました。その結果として今があります。この学校がなければ今の私はありません。

佐々木――高校までの私は、やりたいことがあっても、無理、できない、と諦めてしまう子でした。ところが大学に入り、いろいろな人が、今しかできないよ、と背中を押してくれました。そうして、いろいろな体験をしました。

私は変わったと思います。今では、やりたいことがあるのに、迷ったり、悩んだりすることは時間の無駄、やりたいなら今やっちゃおう、と思うように。

菊地――先輩たちの話を聞いて、とても勇気づけられました。今学んでいることが、実社会に生きているという話を聞いて、とてもモチベーションが上がりました。ありがとうございました。

日本文化学科　田中　綾　准教授（創作論）

人文学部の幅の広さは、多様な人間性を包めるところだと思います。そうした多様性の中に、いろいろなことができる可能性が広がります。そして人文学部の学生を見て思うことは、みんな人間が好きなんですよね。人間への興味が深い。それは卒業してからも活きることだと思います。卒業生には、これからも経験を積み重ね、人としての幅を広げてほしいですね。